

在朝鮮日本人と俳句

——朝鮮俳壇の形成と朝鮮郷土色論の展開——

中根隆行

愛媛大学法文学部教授

研究期間：2016年4月16日～2016年9月30日

受入機関：高麗大学校グローバル日本研究院

要 旨

日本による植民地統治期、在朝鮮日本人の間で盛んであった創作文芸は俳句である。俳句は、集団性をもつ創作文芸であり、句会や結社など俳句を縁にした文芸共同体が形成される。在朝鮮日本人を中心に展開された俳句活動の総体は、のちに「朝鮮俳句」や「朝鮮俳壇」として内地や外地の俳人からも知られるようになる。だが、1945年の日本の敗戦／朝鮮の解放以降、朝鮮俳句の実態はつかみにくくなる。朝鮮俳句は植民地における宗主国文学としてあり、外地引揚げ以降、朝鮮俳句という呼称は公に語られなくなった。また、数十名にのぼった朝鮮俳人の活躍もまた、日中戦争の勃発以降、激減している。現在では、朝鮮半島で刊行された俳誌もまた散逸が進んでおり、その全貌を明らかにすることは困難である。

本報告書は、おもに1910年代から1930年代にかけて朝鮮半島で発刊された俳句雑誌等を対象にして、在朝鮮日本人の俳句活動を追跡し、朝鮮俳句の展開を把握するものである。朝鮮俳句が本格的に始動するのは1910年以降である。『京城日報』の「京日俳壇」欄の選者であったホトトギス系俳句の石島雉子郎や楠目橙黄子らがこれを主導し、1920年に俳誌『松の実』が誕生することによって徐々に朝鮮俳壇が形成される。1930年前後になると、在朝鮮日本人の俳句活動は主要都市を基点に朝鮮半島全域に広がっている。この頃に話題になった議論に朝鮮郷土色論がある。この名称からも推察できるように、朝鮮俳句における朝鮮郷土色の議論は、朝鮮俳壇が内地の俳句界の動向に寄り添いながらも、その独自性をめざす運動であった。この議論が活発になる1930年代は、朝鮮各地の代表的な俳句結社がそれぞれの俳句雑誌をもって自立的に活動できる段階へと歩を進めた時期にあたっている。本報告書では、日本による朝鮮半島の植民地統治のなかで展開された朝鮮俳句の動向とその特徴を、特に『松の実』や『草の実』といった主要俳誌の論調とともに検証している。

在朝鮮日本人と俳句

—朝鮮俳壇の形成と朝鮮郷土色論の展開—¹

1. はじめに

朝鮮俳句とは、日本による植民地統治下の朝鮮半島において詠まれた俳句である。元来、俳諧は座の文学といわれるように集団性をもつ文芸である。正岡子規に始まる近代俳句もまた、芸術性が求められると同時に、俳句活動は俳句結社や結社が位置する地域のコミュニティ・ネットワークとしても機能する面を多分に有している。しかも俳句は、祖国を離れて異郷に渡った日本人移民者たちに好まれて詠まれたという歴史がある。朝鮮半島はいまでもなく、北米や南米、台湾や旧満洲などもそうであるが、現地に移住した日本人のなかでコミュニティができ、日本語新聞や雑誌が発行されると、漢詩文や短歌とともに、必ずといってよいほど俳句欄が設けられていた。

近代俳句を考えると、俳句が海を越える創作文芸であるという点は、看過されやすいものの、重要な特徴である。移民者たちが移住した地で俳句を詠むのは、小説などとは異なって気軽に詠める創作文芸であったということ、加えて、句会や結社という集団性に基づく俳句のシステムが、いわば移民社会のコミュニティ形成にも寄与したからである。それでは朝鮮俳句、つまり在朝鮮日本人による俳句活動は、いつ頃から始まるのか。阿部誠文はこのように述べている。

私の知るかぎり、朝鮮半島における俳句は、明治三二年夏、現在のソウル西方にある仁川日本居留地で、旧派の榛々吟社が盛大におこなわれていたことである。これに対して、新派としての初めての句会、仁川新声会が結成された。以後、仁川、馬山浦、全州、群山、京城 […] と、明治年間に句会が広がっていった。²

明治 32 年は 1899 年にあたる。ここで述べられる「旧派」とは江戸後期より受け継がれて来た俳諧（俳句）を、「新派」とはその「旧派」を「月並み句」と呼んだ正岡子規に始まる近代俳句を指している。仁川の日本人居留地でも、旧派の榛々吟社と新派の仁川新声会とがあり、句会を催し、俳句を詠み披露されていたのだろう。「月並」が毎月開催される句会のことを指しているとおおり、俳句は短歌と同じく集団性を有する創作文芸である。20 世紀を迎えようとする朝鮮半島の日本人居留地で、すでに日本人による俳句活動がなされていたということである。ちなみに、仁川新声会の句会は『ほととぎす』に寄せられた記事でも確認できる。

こうみると、まず注目できるのは日本人移住者と俳句との関係である。朝鮮に限らず、海外諸地域へと移住した日本人にとって、いち早く始められる創作文芸は俳句や短歌であったことは述べたとおりである。こうした創作文芸の特徴は、多少心得のある人がいれば、誰でも手軽に学ぶことができ、かつ日常的に創作可能であったことである。さらにいえば、俳句や短歌は日本の伝統詩歌である。故郷を離れて異郷の地で暮らす人びとにとって、純国産の創作文芸である俳句を詠むということは、自己のアイデンティティやそれを支えるナショナリティをその都度確認するという営みにも重なると

¹本報告書は、『在朝日本人の日本語文学史序説』（韓国ソウル：図書出版ヨンラク、2017 年）に掲載した「在朝日本人と朝鮮俳句—石島雉子郎と楠目橙黄子を中心に」及び「1930 年代の朝鮮俳壇—朝鮮郷土色の議論と俳句雑誌『草の実』を中心に」を加筆修正したものである。

²阿部誠文『朝鮮俳壇——人と作品』上巻、花書院、2002 年、p.7

いう点は重要である。

加えて、俳句活動における句会は寄り集まった人びとのなかで俳句を披露し合うという集団性を持ち、やがては結社の形成へと向かう。俳句の作句活動がより活発になれば、内地や外地の諸俳壇との交流も深まるだろう。この後、朝鮮各地の日本人コミュニティから俳句を縁にした文芸共同体が徐々に形成され始めるのだが、在朝鮮日本人を中心に展開された俳句活動は、のちに「朝鮮俳句」や「朝鮮俳壇」として内地や外地の俳人からも知られるようになる。本報告書では、おもに 1910 年代から 1930 年代にかけて朝鮮半島で発刊された俳句雑誌を対象にして、在朝鮮日本人の俳句活動を追い、俳句をとおした在朝鮮日本人の社会性およびその広がりを検証する。

2. 朝鮮俳壇の形成

朝鮮半島において俳句活動が本格化するのには、日韓併合条約が締結された 1910 年以降である³。この時代の朝鮮俳句を牽引したのは、朝鮮総督府の御用新聞に改変された『京城日報』の「京日俳壇（京日俳句）」欄であった。京城日報社の初代社長は『国民新聞』俳句欄の選を務めたホトトギス系の重鎮吉野左衛門であり、「京日俳壇」の選者は石島雉子郎、そして楠目橙黄子へと受け継がれている。常設欄ではなかったが、『京城日報』に「京日俳壇」欄が設けられることによって、朝鮮俳句は在朝鮮日本人の俳句の動向を読者に届ける代表的なメディアをもったということになる。1910 年代における朝鮮俳壇は、朝鮮各地の俳人を繋ぐメディアが登場し、そこから俳人相互の交流が徐々に活性化する時期にあたっている。

また、『京城日報』に俳句欄が開設されたことで、のちに展開する朝鮮俳句の傾向も定まったと考えられる。吉野左衛門は『国民新聞』俳句欄の選を務めた子規門の大家でもあり、これ以降朝鮮俳壇はホトトギス系俳句が主流となるからである。その左衛門から選者を委ねられた石島雉子郎は、高浜虚子『進むべき俳句の道』でも取りあげられている俳人である。彼は 1913 年から 1921 年まで朝鮮に滞在している。キリスト教プロテスタントの国際的団体である救世軍の士官であり、京城では西大門近くの救世軍宿舎に暮らしていた人物である。その雉子郎のあとを継いで選者を務めたのが、楠目橙黄子である。朝鮮滞在は 1915 年から 1922 年までであるが、彼は高知の間組の社員であり、仕事柄、朝鮮をはじめとして旧満洲や九州などを転々としている。1924 年の高浜虚子の朝鮮旅行に同行しており、虚子の信頼を得ていた人物でもある。

1910 年代における在朝鮮日本人の俳句活動の詳細は、いまだに不明な点が多いものの、石島雉子郎や楠目橙黄子らはその中心的役割を担っていたことは間違いない。そこで、京城在住の俳人らによってのちに創刊された松の実吟社『松の実』に載録された資料から、草創期の朝鮮俳壇を概観してみよう。『松の実』は、1920 年に京城で創刊された在朝鮮日本人による日本語雑誌で、後年、朝鮮俳句の礎を築いた俳句雑誌と評されており、「朝鮮及満洲に在住する俳人相互間と、又内地に在つて特に此異境土に縁故と好感を持たるゝ俳人間との親しみを結びつける」ことを目的として発刊された⁴。この『松の実』では、朝鮮特有の新赛季提唱という動きも出て来るものの、当時は朝鮮と旧満洲の地域的分化も進んでおらず、創刊当初は「只朝鮮の色、満洲の臭ひを表」すことを求めていたという点も、草創期の朝鮮俳壇のありようを窺う点で興味深いと思われる⁵。

まずは『松の実』第 5 号（1921 年 2 月）に掲載されている蝸牛洞「雉子郎氏と朝鮮」を見てみよ

³阿部誠文『朝鮮俳壇——人と作品』（前掲）

⁴橙黄子「お別れの言葉」『松の実』第 19 号、1922 年 4 月

⁵無記名「句集出版のこと」『松の実』第 28 号、1922 年 11 月

う。この年に朝鮮を去ることになる石島雉子郎についてのエッセイだが、『松の実』創刊号には「朝鮮的色彩」と題する俳句を発表していたものの、貧しいなかで救世軍の活動を続けながらも二人の子どもを相次いで亡くし、この時期は俳句から遠ざかっていたというエピソードなどが記されている。そのなかで注目されるのは、朝鮮の俳句界が三つの隆盛期に分けて略述されている点である。第一期とされるのが、吉野左衛門が『京城日報』紙上に「京日俳壇」を新設し、石島雉子郎に選者を委ねてから、『京日俳句鈔』『続京日俳句鈔』が刊行された時期である。第二期は仁川で発行されていた『朝鮮新聞』紙上に「朝鮮俳壇」欄が開設された頃である。「朝鮮俳壇」の選者は村上鬼城や飯田蛇笏らとともにこの時期のホトトギス系俳句の中興を支えた渡辺水巴である。これ以降の朝鮮俳壇では、高浜虚子を筆頭に内地の著名俳人に撰を依頼する機会が多く見受けられる。そして、『松の実』が創刊されて以降の時期が第三期として位置づけられている。

朝鮮俳壇は、すでに 1910 年代から著名な俳人として知られた指導者たち、彼らを支える在朝鮮の俳人たち、そして俳句を投稿する各地の俳人・俳句愛好者たちの三層から徐々に形成された。1920 年の『松の実』創刊時について蝸牛洞は、次のように述べている。

第一期、第二期時代に保育せられた俳句界は各所に句会を起し時に五句集会となり、時に謄写刷りの会報を発行し、ホトトギスの地方俳句に猛然たる勢を示し雑詠などにも相当顔振れが殖たものだ。今度松の実が発行せられて俄に四百名の社員を得た事は決して偶然ではない。⁶

『松の実』創刊まで指導的な俳句雑誌がなかったという点から推察すれば、この時代に俳句が隆盛した理由は新聞雑誌というメディアの存在に求められる。1910 年代には、『京城日報』の「京日俳壇」欄や『朝鮮新聞』の「朝鮮俳壇」欄のほかにも、複数の日本語新聞や雑誌に俳句欄が登場している。雑誌でいえば、『朝鮮及満洲』や『鉄道青年』などでも俳句欄が確認できるからである。こうした日本語新聞や雑誌に俳句欄が開設されるということは、編集者や読者に俳句への関心があり、同時に、新聞雑誌に俳句が掲載されることによって、新たに在朝鮮日本人の俳句にかんするイメージも高められ、刷新されていったことを示している。

3. 石島雉子郎から楠目橙黄子へ

日本語新聞や雑誌における俳句欄の誕生は、この時期に各地で句会が催されていたことと相互依存的な関係にあるのであり、また本格的な俳句雑誌が『松の実』創刊を待たなければならないことを踏まえると、その当時の新聞雑誌メディアの俳句欄の存在はきわめて大きかったといわざるをえない。たとえば、ここに『松の実』で中心的存在となる楠目橙黄子を例に考えてみよう。彼は『松の実』第 5 号（1921 年 2 月）から「京城の俳句界と私」を連載している。その初回は、次のような回想から始められている。

大正三年の初冬、私が此龍山に住むやうになつて間もなくであつた。一所に居る葦城氏が俳句を学んで見たいといふのが動機で、私は久しく廃めてゐた句作に復活するやうになつた。初めて句作を試みる葦城氏と二人で題を課して毎日五句位づゝ作つた句を、当時雉子郎氏が選をしてゐた京城日報の京日俳壇に投じて見た。處が、実は左程自信も期待もなかつた返り新参の自分の俳句

⁶橙黄子「社員諸兄へ」（『松の実』第 3 号、1920 年 12 月）でも「第一号発行後新入社員が約百名の多数に上り合計三百十八名を算するに至つたのは我朝鮮満洲俳句界の爲め愉快に堪えません」とある。

が意外にも雫子郎氏の選に入つて予期以上に発表されたので、私は可成面喰ひ且つ俳句に対する興味を喚起されざるを得なかつた。で私は、どうやら俳句が面白くなりかけた初心の葦城氏に油をかけ私自身も句作に身を入れだした。さうして京日俳壇に注意の眼を注ぐやうになつて行つた。

楠目橙黄子は「返り新参」と記しているが、再び俳句を始めるきっかけとなつたのが雫子郎選の「京日俳壇」に選ばれたことであつた。そして、そこに遠藤葦城がいる。彼はのちに朝鮮俳壇で知られる俳人のひとりであり、この三年後には『ホトトギス』の虚子選雑詠にも入選を果たすことになる。葦城から乞われて俳句を教え、毎日五句ずつ作句し「京日俳壇」へと投稿する。そして自身の俳句が選に預かり「京日俳壇」に掲載される。ここからみても明らかなおろ、俳句は、作句者がメディアの俳句欄に投稿し、その俳句が掲載されることで自信をつける、いわば承認システムとして機能する参加型の創作芸である。のちの朝鮮俳壇において中心的人物となる楠目橙黄子を誕生させたのも『京城日報』の「京城俳壇」であつたのだ。

このあと楠目橙黄子は、石島雫子郎から句会に誘われるも青島出張などとも重なり、やっと参加できたのが 1915 年 2 月 11 日であつたという。その数日前に橙黄子は、雫子郎が住む京城平洞の救世軍士官学校の宿舎を訪れている。簡素な生活を営んでいる雫子郎との出会いを「知己と知る欣びに訪ひぬ春の月」と詠んでいる。ともあれ、このとき雫子郎に誘われた句会が浮城会である。文中には、「京城では既にホトトギス派として犀涯、雨月氏達の鵲巢会といふ句会があつたさうであるけれど、此句会は京城に於ける、雫子郎氏を中心とする俳句界としての最初のものであつた」と記されている。この年の七月まで橙黄子は青島に出張した際も、一週間に一度仁川から届けられる『京城日報』を楽しみに待ち、自分の俳句が採られているかに一喜一憂しながら、「黄海を隔てゝ望む京城の俳句界は如何に私の心を躍らせたであらう」と述べられている。

楠目橙黄子の回想によると、彼の俳句が「京日俳壇」に採録され、石島雫子郎の浮城会に参加する時期が、さまざまな意味で朝鮮俳句にとつても重要な時期にあたる。1915 年 9 月には『京日俳句鈔』が刊行されている。この俳句選集は、未見ではあるが、青島から京城に戻つた橙黄子が雫子郎に勧めたことで実現したものであり、1914 年夏から 1915 年夏までに「京日俳壇」掲載された俳句から約 900 句を選んだ朝鮮初の俳句選集であつた。この頃、雫子郎から直接俳句指導を受け「京日俳壇」を中心に活躍した俳人たちを、橙黄子は「京城否朝鮮俳句界に於ける第一期生」と述べている⁷。このなかには池田義朗から遠藤葦城まで十数名の名が挙げられている。

楠目橙黄子は、「蓋我々はホトトギスの俳句を以て我が俳句の正道と信じ、ホトトギスに於ける虚子先生選の雑詠を句作上の最高目標としてゐた」と回想している⁸。『京城日報』の俳句欄の開設、そして石島雫子郎、橙黄子という流れは、まさにホトトギス系俳句の潮流である。この時期、日本では高浜虚子の俳壇復帰とホトトギス雑詠欄の復活を経ており、その動きと歩を合わせるかのように朝鮮俳句、少なくとも京城の俳句は進んでいる。

そして、1916 年が石島雫子郎と楠目橙黄子にとってひとつの分岐点となる。この年の春に雫子郎は『朝鮮及満洲』と『鉄道青年』の選者を引き受けている。その頃、橙黄子は用務で東京を訪れ、念願であつた高浜虚子との面会を果たしている。朝鮮遊学の経験もあり雫子郎とも親しかった池内たけしと会い、彼の案内でホトトギス発行所を訪問したのである。しかし、朝鮮に帰ると、雫子郎から救世軍の職務の都合で「京日俳壇」を始めとする選者を一切辞める旨を伝えられる。『京城日報』俳句

⁷橙黄子「京城の俳句界と私（二）」『松の実』第 6 号、1921 年 3 月

⁸橙黄子「京城の俳句界と私（三）」『松の実』第 7 号、1921 年 4 月

欄の選者は三年間務めたことになる。この雉子郎の辞任を機に橙黄子らによって編纂されたのが『続京日俳句鈔』であり、同年 11 月に出版されている。

注目したいのは、『続京日俳句鈔』出版に合わせて石島雉子郎が『京城日報』に載せた「朝鮮趣味の俳句」という紹介記事である。ここで雉子郎は、この俳句選集を「朝鮮に住む我等が其周囲にある風物に対して、思ふ儘に詠出た所に独特の興味がある」と述べ、末尾には「自画自賛の嫌ひはあるが、半島在住の諸兄に、此の如き朝鮮趣味を發揮したる句集の一読を強要するものである」と結ばれている点である。楠目橙黄子も、この文章を引用しながら「私は此の句集に於て我々の目的とする郷土趣味の吟詠、即ち朝鮮的色調の現れた句を多く見出し得る事に大なる満足を感じたのである」と記している⁹。のちに提唱される朝鮮郷土色の議論が、この時期から提唱されていたことは明記しておきたい。

1910 年代の朝鮮俳壇は、いわば草創期特有の試行錯誤の時期に相当する。「我朝鮮俳句界の趣向が多く中央俳壇の刺戟によつて動いたものであり、且又是に追従せんと努力した其の迹を知ることが出来る」と楠目橙黄子が回想するように、朝鮮俳壇は内地のホトトギス系俳句の動向をにらみ、そのあとを追従しようとしたことは間違いない¹⁰。しかし、そのなかから朝鮮独自の俳句を立ち上げる試みもまた生まれていたのだ。石島雉子郎から楠目橙黄子に引き継がれた経緯は、この朝鮮独自の俳句を打ち立てようとする道筋をも指し示している。この朝鮮独自の俳句は、のちに紆余曲折を経て、1930 年代を中心に朝鮮郷土色をめぐる議論となって現れることになる。

4. 朝鮮俳壇と朝鮮郷土色

1930 年前後になると、在朝鮮日本人の俳句活動は主要都市を基点に朝鮮半島全域に拡がり、かつてないほどに活況を呈していた。この頃の朝鮮俳壇は外地および海外最大の俳句王国として知られていた。1920 年前後から高浜虚子選のホトトギス雑詠入選者数も総じて増加の一途をたどっており、内地の主要地域にも比肩するほどで、外地・海外のなかでは圧倒的である。ここでは、1930 年代前半における朝鮮俳壇の動向を、朝鮮郷土色の議論とともに検討する。まずは見取り図を示しておこう。1930 年前後の朝鮮俳壇の趨勢について、京城日报社の記者であり、また俳句雑誌『青壺』を主宰していた北川左人は、みずから編纂した『朝鮮俳句選集』（1930 年）の刊行に際して、次のように述べている。

朝鮮における俳壇は、昭和の今日と大正の末期とを比較したゞけでも実に隔世の感あらしめらるゝほどのなやかさとなつてゐます¹¹。

この時期、朝鮮における俳句結社の機関誌は主要俳誌だけで 14 誌を数えている。その選者も『草の実』（京城）に楠目橙黄子、『青壺』（京城）に山口誓子、『カササギ』（釜山）に池内たけし、『カリタゴ』（木浦）に清原柊童、『土城』（平壤）に飯田蛇笏、『アリナレ』（新義州）に吉岡禪寺洞など内地の著名俳人が並び、朝鮮滞在のある楠目橙黄子や池内たけしに加え、『カリタゴ』同人に請われて木浦に移住した清原柊童など、朝鮮にゆかりのある俳人も多い。また、その誌名もまさに朝鮮の風物詩といった趣である。ちなみに、木浦の俳誌『カリタゴ』は多くの朝鮮俳人を育成した朴魯植の活躍でも知られている。

それでは、朝鮮俳句にとって 1930 年代はどのような時代であったのか。少なくともこの時期を

⁹橙黄子「京城の俳句界と私（六）」『松の実』第 10 号、1921 年 7 月

¹⁰橙黄子「京城の俳句界と私（三）」『松の実』第 7 号、1921 年 4 月

¹¹北川左人「巻末の辞」『朝鮮俳句選集』青壺発行所、1930 年

語る上で欠かすことのできないキーワードは朝鮮郷土色である。この語は、朝鮮俳壇に限らず、美術や工芸、短歌などの領域でも話題となった。郷土色や地方色の話題は、日本内地（地方色・郷土色）や台湾（台湾色）でも議論される話題であり、朝鮮俳句独自のものではなく、同時多発的に広がった現象である点が重要であるのだが、朝鮮俳壇では、朝鮮郷土色に纏わる議論は 1916 年の時点まで遡ることができる。

それに続く 1920 年代は、朝鮮郷土色のスローガンの提唱とその模索の時期である。朝鮮初の本格的な俳句雑誌と評された『松の実』から紹介しておこう。「此郷土芸術としての俳句を、我朝鮮に移して新なる朝鮮の俳句として特色を完美せしめることは、朝鮮に於ける日本人の新文化的建設を実現する一面ではなからうか」（楠目橙黄子「朝鮮色の句」）¹²。ここでは、内地の俳句を朝鮮に移植して独自の朝鮮俳句を創出することが、在朝鮮日本人の「新文化建設」に繋がると述べられている。

日本による植民地統治期であった朝鮮半島において、朝鮮俳句の郷土芸術化は、日本の伝統詩歌の朝鮮への移植・拡張にほかならない。しかし、内地の俳句ではない朝鮮独自の俳句を提唱することは、日本の歳時記に基づいた内地俳句、あるいは内地俳壇への対抗をその内容において志向するものでもあった。たとえば、戸田雨瓢編『朝鮮俳句一萬集』でも、その編集方針として「多く朝鮮特種の色彩を表現せる作句を採」ることが掲げられている¹³。この点について、のちに高浜虚子は、1930 年代に海外独自の歳時記を編纂することについて異議を表明し、海外の季寄せを「特別の取除け」、つまり例外として位置づけている¹⁴。

こうした流れを受けた 1930 年代は、いわば朝鮮俳句の郷土芸術化が質量ともに推進された時期にあたる。たとえば、北川左人編『朝鮮俳句選集』は、1927 年から三年間に発行された俳句雑誌や新聞雑誌の俳句欄に掲載された朝鮮俳句五万数百句を集め、そのなかから一万余句を選び季題別に載録したものである。「朝鮮俳壇の鳥瞰図としての最も完全なる句集」「習作上その参考とするに足る最も善良な句集」をめざして編まれた『朝鮮俳句選集』は、同じく北川左人が編纂した『朝鮮固有色辞典』（1933 年）とともに、朝鮮における歳時記的な特徴を有しており、朝鮮俳句の郷土芸術化を実践した成果でもある。

朝鮮における固有色——郷土色、地方色——の凡ゆる語彙を網羅し、その沿革、その特質、その利害、等々、を詳かに纏めた文献、軽敏な典籍、重宝な書冊が、いまだ発見できない状態にあつたといふことは、一面また朝鮮の出版界における一大欠陥であつたともいはなければなりません。

15

北川左人は、朝鮮各地の俳句結社あるいは俳人間の交流を繋げるような役割を担った人物でもある。この引用からも明らかなように、『朝鮮固有色辞典』もまた俳句を愛好する在朝鮮日本人の便宜を図るために編纂していることは注目してよい。ここに記される「朝鮮における固有色——郷土色、地方色」は、楠目橙黄子による「朝鮮色」の提唱と同様に、直接的には主に内地俳句にたいする朝鮮俳句の独自性を追求し、俳句を愛好する在朝鮮日本人や朝鮮人に朝鮮固有の文化風土の特徴とは何かを広く訴えるための言葉としてある。ここには朝鮮にたいする植民地主義的な関心とともに、いわば朝鮮

¹²橙黄子「朝鮮色の句」『松の実』第 16 号、1922 年 1 月

¹³「一 編者は是が編纂に着手するや暇ある毎に普く鮮内各地を旅行して親しく其の風物に接し是に依りて多く朝鮮特種の色彩を表現せる作句を採り半島の文芸を広く世に紹介せん事に努めて意を用ひたり」（戸田雨瓢編『朝鮮俳句一萬集』朝鮮俳句同好会、1926 年）。

¹⁴高浜虚子「熱帯季題小論補遺」『定本高浜虚子全集』第 11 巻、毎日新聞社、1974 年

¹⁵ 北川左人「巻末語」『朝鮮固有色辞典』青壺発行所、1932 年

を第二の故郷として位置づけようとする在朝鮮日本人の使命感ともいえるようなものも認められる。

こうした朝鮮郷土色の議論は、前述の通り、何も朝鮮俳句に限られる問題ではない。朝鮮を第二の故郷ととらえる郷土主義的な議論は、在朝鮮日本人社会では早くも 1910 年代の教育界にその萌芽を窺うことができる。ここからわかるのは、朝鮮郷土色の議論は、朝鮮各地に暮らす在朝鮮日本人の地域的アイデンティティをめぐる問題であり、俳句に詠まれる朝鮮郷土色の内実にかかわる問題では必ずしもないということである。朝鮮俳壇において先駆的に朝鮮郷土色の問題が招致されたのは、まずもって俳句が地域性に依拠する創作文芸であったからにほかならない。

5. 俳句雑誌『草の実』からみる朝鮮俳壇

1930 年前後から断続的に増加する朝鮮郷土色の議論は、曲がりなりにも朝鮮俳壇が確立期に達していたことを物語っている。朝鮮各地の俳句結社が機関誌をもち、それぞれ俳句雑誌を主宰していた戸田雨瓢や北川左人の一連の業績が登場すること、その活況のなかで改めて朝鮮俳句とは何かという問いかけが朝鮮郷土色の議論へと結実したのである。1930 年代は、各地の俳句雑誌が朝鮮俳壇を支える時期となる。

1930 年代における朝鮮俳壇の代表的な俳句雑誌といえば、草の実吟社（京城）の『草の実』である。もとより、ほかにも清原枌童を選者に仰ぎ朴魯植や村上杏史が支えた木浦の『カリタゴ』や、江口帆影郎主幹の元山の『山葡萄』など、朝鮮各地の地域性を活かして独自に活動した俳句雑誌はあるのだが、朝鮮俳壇の正統性という点からすれば『松の実』の系譜を受け継いでもいる『草の実』がその筆頭に挙げられるだろう。楠目橙黄子は、『草の実』誌上で以下のように語っている。

私が前に朝鮮にゐた頃、「松の実」といふ俳句雑誌を発行してゐたが種々の事情のもとに三年で廃刊した。其後京城で「長鼓」「青壺」といふ雑誌が出たが是も永続することが出来なかつた。

〔／〕其間に元の「松の実」同人が新田如氷氏の援護の下に同人雑誌の形式の小俳句雑誌を出したのが此「草の実」であることは茲に私が改めて述べるまでもないことである¹⁶。

いわば『草の実』は、楠目橙黄子を中心に運営された『松の実』の後継誌に位置づけられる俳句雑誌である。『草の実』は、横井迦南と楠俚人が編集を始めとする主幹的な役割を担って、内地在住の橙黄子が選者を務めている。創刊は 1925 年であり 1940 年まで続いた、朝鮮では最も長寿の俳句雑誌であった。迦南と俚人は、ともに石島雉子郎が主宰した句会である浮城会時代から橙黄子とともに参加している。句会としての浮城会から松の実吟社『松の実』を経て『草の実』へという道筋を踏まえて考えると、『草の実』は、京城というよりも朝鮮俳壇の正統的な俳句雑誌と位置づけたほうがよい。この『草の実』が通巻 100 号を迎えた 1934 年 10 月の松の実雑詠の選評を、橙黄子は次のように始めている。

十月号は草の実第百号といふことである。誌面を新しくする意味で、此選評の如きも何んとか一と工風あるべきだが、今のところ私に頭を捻つてゐるいとまもないから、従来通りの漫評をつづけることにする。

糸瓜忌や詠みたのしめる牧舎の句 紫牛

此句は紫牛君の生活を知ることによつて興味が深い。子規の流れを汲む一俳人が、朝鮮の一地方に安住して家畜を養ひ、其生活を楽しんでゐる。たま／＼子規の忌日に当り、自己の周囲を諷詠

¹⁶ 楠目橙黄子「改巻にあたりて」『草の実』、1934 年 8 月

して俳句をたのしんである。自分を見出した満足な心持があるのである。

瀬祭忌としても知られる糸瓜忌は、9月19日の正岡子規の忌日である。土山紫牛は朝鮮俳壇の中堅俳人であり、のちに朴魯植に始まる朝鮮俳人の評論も手がける人物である。『草の実』に掲載された酒井九峰のエッセイには「土山紫牛氏や大塚楠畝氏が高商に居て、然も当時より半島俳壇の麒麟児であつた」という記述もある¹⁷。その来歴は不明だが、紫牛は、少なくとも京城高等商業学校に在籍する学歴エリートで、その頃から若き俳人として活躍しており、1934年現在、朝鮮で家畜の世話をしながら正岡子規の写生よろしく朝鮮のホトトギス系俳人として諷詠を楽しむ生活をしているということである。

朝鮮俳壇を世代的にとらえたとすれば、石島雉子郎から楠目橙黄子へと引き継がれたホトトギス系俳句の潮流は、彼らが浮城会や『松の実』で指導した横井迦南や楠俚人らが第一世代、そののち高商時代に頭角を現した土山紫牛や大塚楠畝らが第二世代ということになるだろうか。朝鮮俳壇の1930年代は、紫牛の俳句に詠まれるように、彼ら第二世代が中堅俳人として地歩を固める時期に相当する。この点、1933年に夭折する朝鮮俳人朴魯植も、1920年代に『松の実』の橙黄子選雑詠欄を経て『ホトトギス』の虚子選雑詠の常連となり、やがて木浦の『カリタゴ』の中心的な俳人となった第二世代に属し、1930年前後の朝鮮俳壇を支えた人物のひとりである。

京城の『草の実』は、前述の引用にあつたとおり、1933年10月で100号を迎えている。それ自体が朝鮮俳壇の歴史であるとはいえ、この翌年となる1934年には1930年代前半の朝鮮俳壇を象徴するような出来事が起こっている。断続的に継続されてきた『京城日報』俳句欄の廃止である。これについて楠目橙黄子は「京城日報の我々の俳壇は約一年間京城日報社の好意で紙面を割愛されたが、今度新聞社の都合で文芸欄を廃止されたため、俳壇も解消したことになった。私が選句を担当したに就いて御声援下さった諸氏の御厚情に対し茲に厚く御礼申上げる」¹⁸。この報は横井迦南から橙黄子にもたらされたものであるが、迦南は「京日俳壇は、今回廃止することになったさうだ、正式に紙上には発表されぬが……」と述べ、「何はとまれ京日紙が古く左衛門氏時代から我俳壇に寄興すること少からざりし因縁を思ふと、今回のこと誠に遺憾に堪えぬ」としている¹⁹。

もとより、「京日俳壇」廃止の報は、朝鮮半島で最も大きな日本語新聞から俳句欄が消えることを意味する。前述したとおり、『京城日報』の俳句欄は1910年代に朝鮮俳壇の基礎を築き、吉野左衛門から石島雉子郎、楠目橙黄子へと引き継がれたホトトギス系俳句の流れを決定づけた俳句欄である。だが、その俳句欄廃止を淡々と報じる楠目橙黄子や「誠に遺憾」と述べる横井迦南は、どこか余裕さえ感じられるように思われる。さらに同年7月には『大阪毎日新聞』朝鮮版に「半島俳壇」が新たに設けられる旨が報じられている。「大毎紙朝鮮版に半島俳壇が設けられた。斯くて我が俳壇が開拓されて行くのは愉快なことである、各位の御投吟をお勧めします」²⁰。

『京城日報』の「京日俳壇」の廃止と『大阪毎日新聞朝鮮版』の「半島俳壇」の新設。これらを報じる記事から推察できることは、京城の俳句雑誌『草の実』が朝鮮における日本語新聞や雑誌からいわば自立しているという点である。1910年代の朝鮮俳壇は、『京城日報』や『朝鮮新聞』の俳句欄といったメディアに依存していた。1920年代になると『松の実』という本格的な俳句雑誌が京城に登場するものの、三年で廃刊となっている。その後継誌と位置づけられる草の実吟社『草の実』は、この時点で創刊以来100余号を数えている。同じ時期に創刊された木浦の『カリタゴ』など各地域の

¹⁷酒井九峰「あの頃その頃」『草の実』、1933年10月

¹⁸楠目橙黄子「選評」『草の実』、1934年3月

¹⁹迦南「蛤洞より」『草の実』、1934年2月

²⁰迦南「蛤洞より」『草の実』、1934年7月

俳句雑誌も、継続して刊行されていることを踏まえると、1930年代の朝鮮俳壇は、京城の『草の実』にみたどおり、朝鮮各地の代表的な俳句結社がそれぞれの俳句雑誌をもって自立的に活動できる段階へと歩を進めた時期にあたっている。

6. むすびにかえて

こののち日中戦争が勃発した1937年以降になると、朝鮮俳壇はその勢いを失っていく。時局の影響もあり、1941年7月には『山葡萄』（元山）『草の実』『冠』（京城）『カリタゴ』（木浦）『いちご』（光州）『かささぎ』（釜山）といった朝鮮各地の俳誌が統合され、朝鮮俳句作家協会の機関誌『水砧』が創刊されているものの、その翳りは明かであった。

朝鮮俳句は、日本による朝鮮半島の植民地統治のなかで展開された。それは宗主国の伝統詩歌が支配／被支配の力学のなかで紡がれていったことの証左である。しかし、朝鮮半島でなされた朝鮮俳句の営為は、それのみに収まるわけではない。敗戦／解放後の道程にも目を配れば、朝鮮俳壇のなかで培われた人的ネットワークは、数は少ないものの、旧在朝鮮日本人たちの間や彼らとのちの韓国俳人との間で新たに深められていく。

ちなみに、解放後の韓国俳人たち——李桃丘子、李永鶴、崔炳璉等——は、なぜ日本語で俳句を詠んだのだろうか。彼らの多くがホトトギス系であり、その俳句は有季定型を遵守する伝統俳句の系譜のなかに位置づけられる。たとえば、李桃丘子は「俳句は季題を詠む詩である」と語っている。このように韓国俳人が日本の伝統詩歌である俳句の歳時記や季寄を重視する有季定型へと赴くのは、季題を詠む俳句の特殊性それ自体に惹かれたからと考えられる。つまり、季節の風物を詠むことに長けた俳句の文芸性である。

敗戦／解放後における朝鮮俳壇の人的ネットワーク、そして韓国俳人が惹かれた俳句の文芸性をより深くとらえるためには、1930年前後の朝鮮俳壇における朝鮮郷土色の議論を改めて検討する必要があると思われる。日韓文化交流史へとかたちを変えて展開した敗戦／解放後の道程は朝鮮俳壇における俳句活動のなかで築かれた縁が礎となったものであり、在朝鮮日本人たちが追求した朝鮮郷土色とは、朝鮮半島の季節の風物をいかに詠むのかという問題であったからである。

参考文献

- 阿部誠文『朝鮮俳壇——人と作品』上下巻、花書院、2002年
- 許敬震「日本植民地時代における韓国人の俳句創作」、『環』vol. 40、藤原書店、2010年1月
- 楠井清文「植民地期朝鮮における日本人移住者の文学——文学コミュニティの形成と「朝鮮色」「地方色」」、『アート・リサーチ』第10号、立命館大学アートリサーチセンター、2010年3月
- 中根隆行「朝鮮詠の俳域—朴魯植から村上杏史へ」、日本近代文学会関西支部編『海を越えた文学—日韓を軸として』、和泉書院、2010年6月
- 中根隆行「宗主国文芸の転回—朴魯植と日韓俳句人脈」、『社会文学』第37号、2013年2月
- 中根隆行「異郷への仮託—朝鮮俳句と郷土色の力学」『跨境—日本語文学研究』創刊号、笠間書院、東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校日本研究センター、2014年6月
- 中根隆行「李桃丘子と俳句—朝鮮俳句の解放／敗戦前後から現在へ」『跨境／日本語文学研究』第3号、東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校GLOBAL日本研究院、2016年6月
- 中根隆行「在朝日本人と朝鮮俳句—石島雉子郎と楠目橙黄子を中心に」『在朝日本人の日本語文学史序説』韓国ソウル：図書出版ヨンラク、2017年6月
- 中根隆行「1930年代の朝鮮俳壇—朝鮮郷土色の議論と俳句雑誌『草の実』を中心に」『在朝日本人の日本語文学史序説』韓国ソウル：図書出版ヨンラク、2017年6月

略 歴

中根 隆行

[学歴]

1993年：早稲田大学第二文学部文芸専修卒業〔学士（文学）〕

2001年：筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科文学専攻修了〔博士（文学）〕

[経歴]

2001年：韓国教員大学校総合教育研修院中等教員養成所専任講師（～2003年2月）

2003年：ハンバツ大学校外国語学部日本語科客員教授（～2005年2月）

2003年：忠南大学校人文科学研究所共同研究員（～2005年2月）

2004年：高麗大学校日本学研究所共同研究員（～2005年2月）

2005年：愛媛大学法文学部人文学科助教授（～2007年3月）

2007年：愛媛大学法文学部人文学科准教授（～2014年9月）

2014年：愛媛大学法文学部人文学科教授（～2016年3月）

2016年：愛媛大学法文学部人文社会学科教授（現在に至る）